

東洋英和の英語授業の思い出

江藤 ゆ き

東洋英和の英語授業の思い出は、大正15(1926)年私が東洋英和小学科4年に転校した時に遡る。

公立から私立へ転校してびっくりした事は、教科では数々あったが、その最大のもの英語であった。英和では当時、小学校1年から英語の授業が週1回外人教師によって行われており、易しい会話や歌等が教えられていて、教科書はなかった。私にとっては外国人を目の前に見るのも始めてなら、ましてや英語などチンプンカンプンで、茫然と着席しているだけだった。みかねた母が、一学期間授業を傍聴させて頂いてメモをとり、自宅でおさらいしてくれた。それでも中々分からなかったが、最前列の友達が「歌の時は、ニコニコして、タムタムタムと口を動かしていればいいの」と教えてくれたので少し気が楽になった。

耳が慣れてくることは有難いもので、いつか私も“Jack and Jill went up the hill”の歌を、“ジャックカンジョウエンタブザヒオ”と歌えるようになった。今にして思うと、意味はろくに分からずに耳だけで覚えたこの歌詞の方が、今、英文を読むよりずっと英語らしい発音ではなかったかと思う。

六年生でミセス・ピンセントにお習いした時は、生徒が動物や人形等のおもちゃを持参して買物ごっこをしたり、チャートを使って先生の質問に答えられるように成長していた。私は、黒猫の足(チャート)を“何ですか”ときかれて、“cat's stocking”と答えたら、先生はOK、OKとニコニコして下さった。

高女科1年(現在中学1年)の英語授業は、当時としては劃期的な教授法であったろう。毎日英会話があり、それに加えて発音記号の勉強があった。英会話は校長ミス・ハミルトン直々の授業で、日本人の先生は陪席だけで通訳はなし。発音記号の読み書き、書き取りが一通り出

来るようになったら発音記号だけで編纂されているStandard English Reader Iが与えられ、三学期になって始めてアルファベットを習い、上記のリーダーの普通版を使わせてもらったのであった。

二年生以上は、日本人の先生によるリーダーの講読、文法があり、英会話は外人の先生から“Thinking in English”その他のテキストを使いながら教えて頂いた。五年生の時は、短いお話を(英文)二、三度きかされ、すぐ自分の言葉(英語)で書きあらわす練習もあった。

当時、英語の点数が学年の基準に満たない時は英語の時間だけ原級に留められた。そして三年まで修了出来れば英和を卒業出来たのである。英語の時間になると何人かは別室で授業があったが、同級生は、各自の力にふさわしい制度と思って、何のこだわりもなかった。この制度はいつから廃止になったか知らない。

授業ではないが、私達の英語への感性を養って頂いたものに、週一回の英語礼拝がある。讚美歌や奨励も勿論英語、そして学年順に、英語の重句又は段落を暗誦したことである。当番学年は(教室の)黒板に聖書の個所をかいて、毎日少しづつ暗誦した。意味は余り分からなくても、外国語で捧げられる礼拝の中に何か心に迫るものを感じとっていた。

東洋英和の英語授業は、受験準備教育とは程通いものであったが、しらずしらずの中に、耳を養い、発音を身につけ、英語で物を考えてゆく習慣を育てて下さった事は、本当に幸せであった。入学して一番の苦手であった英語が、齢い80を過ぎた今日でも、英和からの最大の贈り物であることを感謝する。

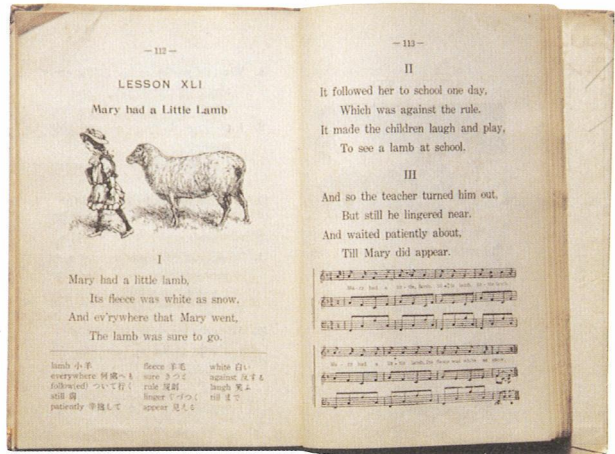
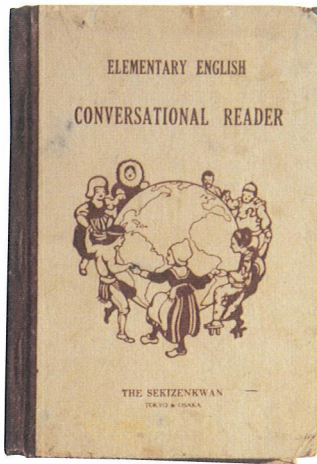
何といっても70年余り前の思い出、記憶の薄れ、間違いはお許しいただきたい。

(1934年高等女学科卒業)

大正・昭和初期の英語教科書

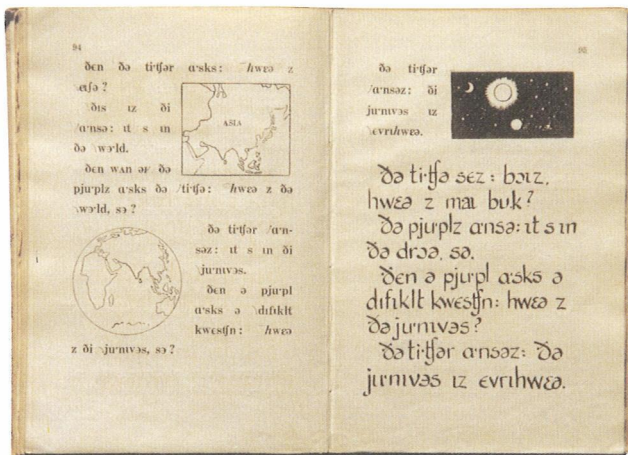
ここにあげた英語の教科書は、大正末から昭和初期にかけて、東洋英和で使われていたものです。このたび、「東洋英和の英語授業の思い出」を執筆して下さった、江藤ゆき氏により、史料室に寄贈して頂きました。当時の英語讃美歌もご寄贈くださいました。深く感謝申し上げます。それぞれの本に説明をつけていただきましたので、ここに紹介いたします。

(中南部講師・史料室嘱託 谷川祐子)

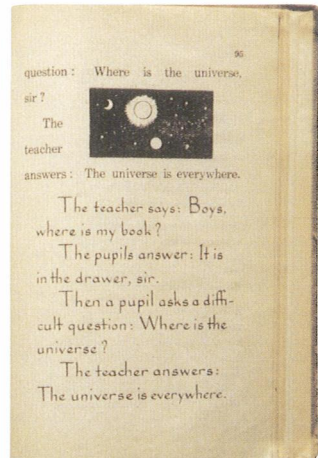


ELEMENTARY ENGLISH CONVERSATIONAL READER, 1926 (大正15) 年刊

小学校4年生で転入した時に、ミス・メガフィンが使っておられたものです。私は英語が全くわからなかったのに、母が英語の授業に出席してくれました時、ミス・メガフィンが下さったテキストです。内容は何一つ覚えていませんが、次の歌は何とか覚えています。 p.27 Alphabet Song. p.42 The Little Indians. p.98 Pussy-cat, Pussy-cat. p.112 Mary had a Little Lamb. p.136 Lullaby p.142 Here We go round the Mulberry Bush. 以上のほかに Row, row, row your boat. Jack & Jill went up the Hill. Singerson had Six Pence. などがありました。



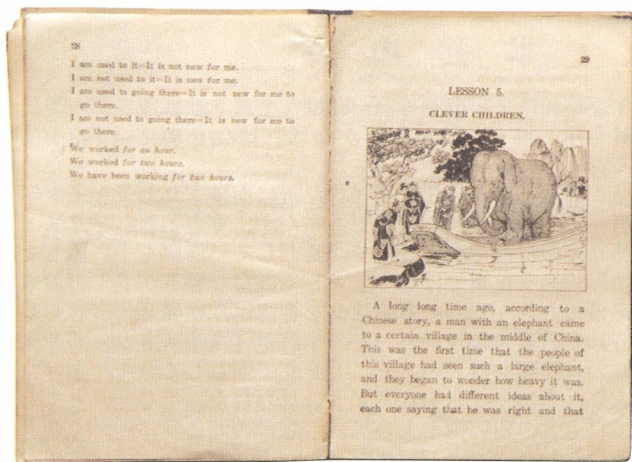
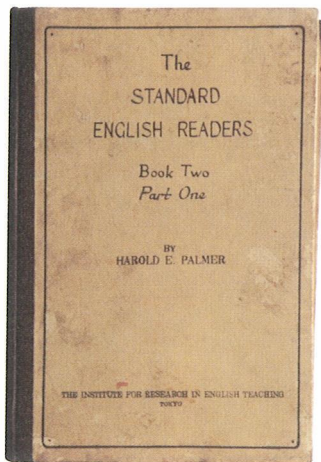
PHONETIC EDITION (発音記号版)



(普通版)

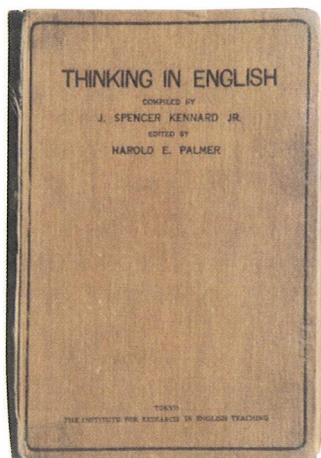
The STANDARD ENGLISH READERS, by H · E · PALMER 1926 (大正15) 年刊

前ページ左側の発音記号のみの教科書は高女科1年（現在の中1）の1・2学期に使ったものです。1・2学期は発音記号の読み方、書き方、書き取りと、この教科書のみを使いました。右側の教科書は3学期に使ったものです。



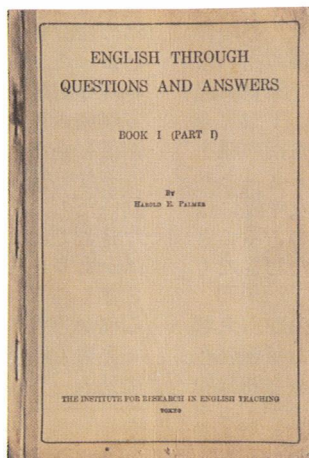
The STANDARD ENGLISH READERS, by H · E · PALMER 1928 (昭和3) 年刊

高女科2年の時に使ったリーダーです。英文法の授業は2年生からだったと思います。
(英文法の教科書はみつかりません。)



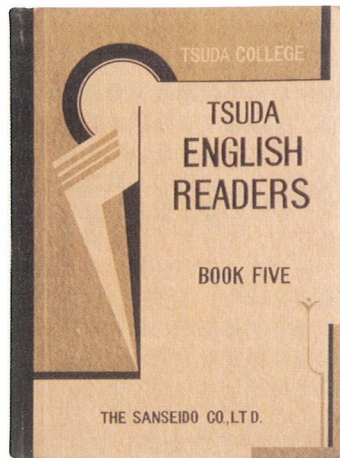
THINKING IN ENGLISH,
by PALMER 1928年刊

高女科3年ぐらいから使った会話の本です。外国人の先生からご指導を受けました。



**ENGLISH THROUGH
QUESTIONS AND
ANSWERS,**
by PALMER 1928年刊

教科書 STANDARD ENGLISH READERに沿った英会話の本です。生徒は一度も使わなかったように思います。



**TUDA ENGLISH
READERS,**
1932年刊

高女科4・5年で使った津田のリーダーです。英文法は、神田イングリッシュグラマーというのを使っていたと思います。難しい本だったという記憶のみです。

〈思い出の先生がた〉 5

石井次郎先生の一味違った礼拝

新 富 英 雄

「英和に来て下さるからにはキリスト教に理解を示し協力していただかなければなりません。」

これは小生が英和に着任した折に面接された石井先生の最初のお言葉であったが、そのとき感じたのはただ院長として学長としての面接上の形式的な言葉ではなく重々しく厳粛な響きがあったということである。念を押すように発せられる言葉の端々から、この学院が「キリストに向けて開かれている」ことを立て前としてることを訴えておられるように思われた。そして口もとの白い歯と太い黒縁の眼鏡の向こうには慈しむような優しいまなざしがあつた。

先生のこのお言葉の呪縛にかかったわけでもないが、当時は私はよく礼拝に出たものである。とりわけ先生ご担当の日は欠かさず出席した。なにも猫かぶりを演じたわけでも信仰を求めていることでもなかった。先生が一貫して語られる「ヨハネによる福音書」に魅せられたからである。ともすれば記号の羅列とおぼしき、心の伴わない礼拝に対し、先生のそれは格調の高い宗教学か哲学の講義を受けているような錯覚に陥る、文字通り有り難い礼拝であつた。

これより3年前、先生は九州大学教授の職を投げうち、先生のお言葉をお借りすると「キリストがその礎を据えられた東洋英和女学院には、今日も、キリストに委託された使命のあることを信じて、その任務に参加させていただきたく希望を持ち」赴任されたのである。

先生が着任され最初に実践されたのが、大学紛争の影響で途切れがちになっていた毎朝の礼拝を再開された事である。10時10分から20分間のこのわずかな時間を、先生は1日のゴールデン・アワーだと認識しておられた。

柔かなお人柄の中に頑固な面もお持ちであつた。その頑固さは「だがしかし」という強調の接続語法に集約されよう。教授会などでの重要事項の審議中この「だがしかし」が先生の真一文字の口から放たれると、われわれ教授会の面々はよく顔を見合わせるものである。きまって付加条件が課せられたからである。これも学長というお立場上仕方がなかったことなのかも知れない。今なお、あの独特のイントネーションの響きが、耳の奥に残っているように思われる。四年制大学構想の夢をもって着任されたのであろうが、1期をもって再び九州の方にお帰りになられた。

ある時、日本短期大学協会外国語教育委員会

の委員をしていただいた小生が、大会のために活水女子大学よりパネリストを1名推薦して欲しい旨のお電話を学長をしておられた石井先生に差し上げたところ、とてもなつかしく色々お話をし



て下さり、四年制大学が実現しなかったことを悔やまれ必ずや実現して欲しいと懇願するかのようなお声が、電話の向こうに聞こえた。「パネリストの件、喜んで協力いたしますよ」この時は「だがしかし」もなくご快諾下さった。これが先生の最後の言葉となった。悲しいことに先生は、短期大学が今の横浜の地に移転した翌年の1987年3月に癌の病魔に襲われ召天されてしまった。最近目にした本で石井先生を芭蕉とその「山路来て…」のすみれの句になぞらえた方がいらっしゃる。「大自然の美しさと創造主の御業を小さな体に反映させて、誇るでもなくひっそりと咲いているすみれの姿に、芭蕉の心は動いたのであろうが、石井先生の日常生活もまた質素で飾り気がなくそれでいて一種高貴な気品がありキリストの香りを漂わせながら、接する多くの人々に温かい思いを分かち与えて下さる何かを秘めておられた」と。

先生も今頃は天国の花園で可憐なすみれの花に見入っておられるかも知れない。(大学教授)

石井次郎先生略歴

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 1910年 | 静岡市に生まれる。(ご母堂、卒業生) |
| 1934年 | 青山学院専門学校英語科卒業 |
| 1934年 | 九州帝国大学法文学部入学(宗教学) |
| 1937年 | 同大学院入学 |
| 1949年 | 青山学院大学文学部助教授
米国ボストン大学大学院入学 |
| 1954年 | 九州大学教育学部助教授(60年教授) |
| 1963年 | 同大学教育学部長 |
| 1972年 | 東洋英和女学院院長、同短期大学学長
同中高部部長、同幼稚園園長 |
| 1976年 | 福岡女学院院長、同短期大学教授 |
| 1981年 | 活水女子大学学長、同短期大学学長 |
| 1987年3月2日 | 逝去(享年76歳) |
| <著書> | 『シュラエルマッヘル研究』他 |

〈資料紹介〉 3 定期刊行物

『校友會誌』・『^{かゝ}楓』

陶山義雄

校友會誌

『校友會誌』および第5号より改名された『楓』は、東洋英和女学校の校友會が年1回発行した雑誌である。校友會は会則の第3条にある通り、「幼稚園師範科及び高等女学科の在學生を通常會員とし、教職員を特別會員」として構成された学内団体であり、その機関誌としての性格を持ちながら、校友會に所属する4部門(修養部、文芸部、体育部、図書部)のうち、文芸部が編集を担当している。文芸部の同人誌の性格を持ちながら、他の3部門の1年間における活動報告や東洋英和における教育活動の成果が報告されている。校友會が結成されて3年を経過した1930(昭和5)年に創刊され、日米開戦の厳しい時局を迎えた1941(昭和16)年の第11号をもって終刊(消滅)している。全11冊に共通しているのは、機関誌として4部門の報告がなされていること、また、第4号以降は(基督教)青年會報告が加えられたこと他は、巻頭の言葉(教員)、生徒からは文苑(多くは修学旅行記や夏期学校感想文)、随想、短歌、俳句、先生方からの寄稿や先生方への取材、哀悼(天国へ送りし友)、英作文数点などから構成されている。平和が脅かされていく厳しい国際情勢の中にあって、東洋英和が辿ってきた道のりが僅か11冊ではあるが、生徒や教職員によって良く書き留められている。その意味でも、この11冊は貴重な資料である。以下に各巻で特筆すべき事項を紹介したい。

創刊号(1930年、全86頁)：ミス・ハミルトン 休暇、聖地周りの帰路報告。

カナダ大臣の英和訪問と日英親善。ミス・キニーと金森義一の新任挨拶。

第2号(1931年、全92頁)：論説「足利尊氏の宗教生活」(岡部周三)。ミス・ハミルトンの感謝祭に寄せた帰朝挨拶(英文)。

第3号(1932年、全87頁、装丁色がガーネット、金文字に変更)：清楓寮定礎式記念写真と完

成した建物。「教育史」(師範科1年、中澤千代子)。

第4号(1933年、全89頁)：哀悼の欄に、「平岩愼保先生の死を悼みて」(桑原由紀子)が、生徒2名(大嶽玲子、岩本静江)への哀悼文5通と共に掲載。

第5号(1934年、全216頁、創立50周年記念号、『楓』と改名)と青年會20周年記念誌(全37ページ)と合本：ミス・ハミルトンの式辞(和英両文)と東京市長(牛塚虎郎)、麻布区長(羽生正)、子爵・斎藤實、山梨英和(雨宮啓作)、静岡英和(相馬信生)の祝辞。東洋英和女学校の沿革。展覧會記録。研究発表[「玩具と子供」(稲葉信龍)、「フランス音楽家・ラモオ」(柳江隆子)、「家庭教育」(小林富子)]; 青年會20年史と現状。

第6号(1936年、全182頁)：ミス・キニーのカナダ旅行記。夏期キャンプ報告(第1回野尻湖開催)光明照子先生のカナダ便り。

第7号(1937年、全222頁)：婦人平和協會(会長：ガントレット恒子)懸賞当選論文(「私は眼下の日米関係をどう見るか」)の掲載(1、2、3、5等賞を英和生が独占)。ミス・ジョーストとミス・マシューソンの赴任挨拶。

第8号(1938年、全151頁)：小野直一校長就任の辞、ハミルトン先生への惜別の言葉と別れの言葉(「変化」)。先生の思い出(在校生6名)。

第9号(1939年、全92頁)：野尻湖夏期学校敷地の写真。御真影奉戴式典内容と参加生の感想文。漢口没落祝賀旗行列参加。戦時色強化。

第10号(1940年、115頁)：ハミルトンより寄稿(「世界を周りで」)。平岩文庫(寄贈図書71冊の目録)。軍事色が更に強化された作文掲載。

第11号(1941年、80頁、初めて英文なし)：皇紀2600年奉祝体育大会出場の記録。小野校長の奉祝辞。国体護持の論調にあって、5年生有志による「昭和15年度氣象観測」の優れた発表を11頁に互って掲載。

なお、『校友會誌』・『楓』は全号揃っている。(大学教授・史料室委員)

『東洋英和女学院 短大だより』

～学友会新聞部発行『楓』も含めて～

飯 島 千 雍 子



短期大学の広報『短大だより』は1970（昭和45）年6月の創刊号から1998（平成10）年1月の最終号（59・60号）まで発行された。19号（1977年）まではタブロイド版2頁で基本的には春・夏号（5月または6月）、秋号（10月または11月）、冬号（1月）と、年3回発行、20号から37号（1986年）まではタブロイド版4頁で、4月と11月の年2回の発行、38号から60号まではB5版8頁で、同じく年2回の発行である。但し、短期大学最終年度の1997年度は合併号として、1月のみの発行となっている。

『短大だより』創刊のいきさつについては、当時の長野彌学長が巻頭言に「学内の意志の疎通をはかるために寄与することができれば幸いである。」と、述べておられる。50号には「『短大だより』第50号までを振り返って」の特集記事があるので関心ある方はこの号を読まれたし。

『短大だより』の発行は広報委員会、後に広報部となる。「小ぶりながらも中味の濃い情報を提供」（50号、新富英雄先生）した『短大だより』は、「随想」、「Book of Books」、「萬華響」、「研究余滴」など、今読んでも新鮮で読みごたえのある多くの記事を掲載している。そこにはその時々発行に携わった教職員の個性が表れており、読み返していると名編集長、名編集員の顔が浮かんでくる。顔の見える広報である。

実は、『短大だより』発刊以前に、広報ではないが、東洋英和女学院短期大学新聞部発行の『楓』があり、1961（昭和36）年11月（1号）から、『短大だより』創刊の前年、1969（昭和44）年10月（23号）まで発行されている。これは新聞と同版で1枚2頁、あるいは4頁で、学友会新聞部が発行したものである。1号のみ定価二十円、2号からは定価十円、発行所は東洋英和

女学院短期大学新聞部、編集兼発行人は当時の学生編集長と思われる個人名となっている。青野、たぬき家、明治屋などなつかしい店の広告も掲載され、第1号編集後記には広告取りでのなかなか面白い苦労話も紹介されている。各号の編集後記だけを読んでも内容があり感心させられるし、学生間で育ち合う力があらわれているようにも思う。広報的な役割も担っていて、当時どのように編集発行されたのか興味深い。

この『楓』は1969年で廃刊になる。この年は「学生による大学改革の要望が紛争の形をとって展開され、その気運は私たちの短大にも及んでいました。」と、先に紹介した50号に芝恭子先生が記されたように、短大にとって試みの年であった。最終23号の編集後記に「ふたことめ」として、「かくて痛烈な自己批判を試みた結果、ここに新聞部の解体を提案したいと思います。とは言えどもおしゃべリアヒルのおしゃべりへの渴望も断ち切り難く。『在るべきか、在らざるべきか、それが問題だ。』」と記されたことばかり苦く伝わって来るものがある。

『短大だより』に創刊から目を通し、また思いがけず『楓』も読むことになったが、ここにはもう30年、40年前の東洋英和短大の、あるいは東洋英和女学院のその時々足跡が遺っている。個人的には面識のない人たちの足跡であるが、なぜか今に関わってくる、語られているような思いがする。各紙面にメッセージがある。人から人へのメッセージ、たよりがある。この「たより」は「発刊のいきさつをそのまま名称にした」と芝先生が書いておられるが、それが今読む私に語りかけてくるのかもしれない。それらの足跡は、私にも「足元をしっかりと踏み締めよ」と声をかけてくれているようでもある。

なお、『短大だより』・『楓』は全号揃っている。

（大学教授・史料室委員）

『コイノニア』

古澤育恵



コイノニアとはギリシャ語で“交わり”という意味である。中高部のクリスチャンの生徒と教師の交わりの場として、コイノニア会が存在し、その会報誌として『コイノニア』が年一回刊行されていた。

コイノニア会の発足のいきさつは1951年に刊行された創刊号に述べられている。当時高等部、中学部各々に受洗者の会であるコイノニアとグロリアが存在し、両者が合併して1950年9月にコイノニア会として発足したもので、会員は90名、全校生徒の約1割であった。

毎月第2土曜に総会、火曜に早天祈禱会、木曜に委員会がもたれ、学年毎に週1回の会を開いていた。土曜の会には先生方をお招きしてお話を伺い、学年毎の会では祈禱会の他に聖書研究や輪読会を行っていた。当時の宗教主任でいらした奥典先生が後年、第23号で「コイノニアと私」と題して、会の起源について書いていらっしゃるが、それによっても当時のキリスト者生徒達の熱心な活動ぶりがうかがえる。その生徒達の精神的支えとして英語と聖書を担当していらした丸山民子先生と、前述の聖書科の奥先生がいらっしゃり、奉仕活動からハイデルベルヒ信仰問答書の勉強会に至るまで、信仰による交わりを持っていた。このコイノニアが契機となって教師間の交わりと未信者の教師への伝道的配慮から全学院の祈禱会が月1回放課後にもたれるようになったそうである。

『コイノニア』は、B5版の小冊子であり、クリスチャンの生徒や先生方の自由投稿による会報誌で最後にその年の活動報告と会員名簿、所属教会が載せられている。このスタイルは創刊号から変わらない。創刊号の巻頭にはグラス宣教師から寄せられたカナダの詩人 Bliss Carman の詩“VESTIGIA”が飾られている。また、長野彌院長や卒業生のコイノニア発会への思い、宣教師の先生方の英文のメッセージなども載せられている。投稿の多くは、学校での日常や教会生活の折々での信仰についての所感である。会員名簿は第3号から生徒に加えて特別

会員として、先生方も掲載されている。

この頃より、会長、書記、会計、顧問と役割が明確化し、例会が毎月第2金曜日放課後、祈禱会が第2火曜日の朝と定められた。

『コイノニア』は表紙のデザインが校章であることは変わらないが、題字は創刊号では『KOINONIA』、第2号ではギリシャ語で『κοινωνία』、第3号は『こいのにあ』とさまざまで、第4号以降ギリシャ語の題字に定着した。発行責任者は第12号まではコイノニア編集委員会、第13号からは中高部コイノニアとなり、活字印刷になっている。

会員数は年々減少傾向にあり、1975年、第23号をもって終刊となっている。第23号には最終号と明記されておらず、どのような事情で発刊が困難となったのかは想像の域を出ないが、受洗者の減少による会の活動の衰退が原因の一つと考えられる。第23号の投稿者は15名、42ページの大半がある生徒のパスカルについての研究小論で占められていた。編集後記にも例年クリスマスに発行しているのに、編集を2月に突然頼まれて原稿を集めるのに苦労した旨が述べられている。当時の社会状況を考えると、教会も大学も含めて日本の世の中全体が学生運動の嵐の影響を受けた後であり、東洋英和も例外であり得ず、キリスト者の交わりであったコイノニア会も何らかの影響を受けたものと思われる。

今改めて創刊号に寄せられた長野院長の、全校生徒の約1割の受洗者は「少ないといえば少ない数である。一寸意外の感に打たれる。然し少しのバンダネが大きなバンを膨らませるようにその少数者の影響は大きい。(中略)札幌でクラーク博士に指導を受けた5人の青年、或いは、熊本の花岡山に聖なる誓をなした5人の青年が明治・大正を通じて日本の精神界に遺した偉大な足跡を思うとき、この90人の人々の結束によって東洋英和に何がもたらされるかを衷心から期待している。」という言葉をふりかえるとき、少人数となったコイノニア会員がクリスマスに英和のまわりをキャロリングしてまわったことや現在まで続いている朝の聖書輪読会の果たす役割の重さを思わずにはいられない。

欠号 6号, 7号 (中高部教諭・史料室委員)

2002年度 史料室報告

- 3月・『史料室だより』1号～50号の合冊、12部納入される。各部等に配布。
 - ・『史料室だより』58号刊行。
- 4月・戸板学園創設者、戸板せき（卒業生）に関する調査のため、戸板学園理事、法人本部長来室。
- 5月・史料室が中高部5階より3階（社会科資料室）に移転。
 - ・第二次世界大戦時に東洋英和に米国日系二世が在学していたか、また戦時下における勤労働員について問い合わせあり。
 - ・鳥居坂にガス灯と桜並木があったか、問い合わせあり。明治・大正期にはあったことを確認。
- 6月・史料室資料の分類に着手。(酒井史料室委員・東史料室委員・谷川担当)
 - ・森ビル用地企画部の依頼で明治から大正にかけての鳥居坂の写真提供。
 - ・「赤い靴はいていた女の子」のきみちゃんゆかりの地、北海道留寿都村に永坂孤児院の写真提供。
 - ・昭和初期の英和の制服について調べるために、来室者あり。
 - ・斉藤実記念館より斉藤氏夫人、春子氏の在籍年と、旧教員、淵沢能恵氏について、問い合わせあり。
- 7月・『史料室だより』資料紹介のための資料を各執筆担当の先生に配布。
- 9月・ミス・カートメル先生に関する資料を法人本部に提供。
- 10月・谷川、村岡花子文庫・赤毛のアン記念館を訪問。
 - ・谷川、プロテスタント史研究会に出席。「カナダ・メソジスト教会の日本伝道の背景」講師 松縄善三郎氏（静岡英和女学院）
 - ・松縄氏よりミス・コーテスに関する資料の依頼あり。
 - ・史料室及び史料室書庫の移転にともなう作業の検討。
 - ・『片山廣子著作集』を出版予定の出版社、片山廣子の随筆調査のための来室。
 - ・資料分類作業の内、図書のラベル貼りはじめる。
 - ・卒業生の片山廣子・柳原白蓮・村岡花子・吉田ルイ子の著作リスト作成。
 - ・『史料室だより』59号、執筆、編集及び

校正。

- 11月・史料室委員会にて英和関係者の著書を積極的に収集することが決められる。
 - ・大学図書館より柳原白蓮に関する著作・論文の問い合わせあり、
 - ・『史料室だより』59号刊行。
- 12月・新史料室(総合校舎地下2階)のレイアウトを一粒社ヴォーリス建築事務所と検討。
 - ・史料室書庫移転のための準備作業開始。
- 1月・学位論文の資料収集のため、ケンブリッジ大学大学院博士課程在籍の大学院生、来室。
- 2月・『史料室だより』60号、執筆、編集及び校正。
- 3月・『史料室だより』60号刊行。

〔主な寄贈品〕

- * 『まっすぐに美しく堅固に』フェリス女学院 1号館記念写真集
 - * 『恵泉の教育 継承と展開』
 - * 『THE PROGRESS OF A MISSION IN JAPAN』横浜共立学園
 - * 『立教女学院の百二十五年』
 - * 『納函記念録(復刻版)』立教学院
 - * 『同志社山脈-113人のプロフィール』
 - * 『本多記念教会五十年のあゆみ』
 - * 『東中野教会90年のあゆみ』
 - * 小学部定礎函(1954年) 収藏品13品目
 - 〔新約聖書(1952年刊)・小学部学則・昭和二十九年度小学部入学案内・昭和二十八年度生徒保護者名簿・『東洋英和新聞』(昭和29年2月9日)・新館建設資金募集趣意書・校舎建築時の写真 等。〕
 - * 堀田志ん 修業證書・卒業證書(1908～1912年)
 - * 後藤和子 学業優等品行方正の賞状 卒業證書(小学科・高等女学科) ピアノ科・英語科修了証(1932～1937年)
 - * 『東洋英和新聞』・『東光』・『かえで』
 - * 大正・昭和初期の英語教科書 等
- ### 〔購入図書〕
- * 片山廣子〈松村みね子〉(1894年卒) 関係『愛蘭(アイルランド)劇集』1928年刊『かなしき女王』・『シング戯曲全集』『ダンセイニ戯曲集』等。
(中高部講師・史料室囑託 谷川祐子)

史料室のE-mailアドレスは

archive@mlsrv.toyoeiwa.ed.jp です。